後　　援　：　コミュニティー・エフエムひめ（淀川防災ラジオ）
株式会社 淀川通信舎（ザ・淀川）

開催日時　：　令和７年４月29日（火・祝）
午後 2時00分～午後 4時00分

開催場所　：　大阪市淀川区民センター　第1会議室
大阪府大阪市淀川区野中南２－１－５
※ 阪急十三駅より徒歩７分・大阪シティバス野中南下車すぐ

費　　用　：　おひとり ５００円　高校生以下 無料
※ 資料代、参加費を含みます

主　　催　：太宰が住んだ大宮 ホームページ管理人 玉手洋一

専用メールアドレス：omiya_dazai@yahoo.co.jp

※ 参加される方は、お名前を記入し、上記メールアドレスへお申込み下さい。

※右のQRコードを読み込み、「メール作成画面はこちら」をクリックすると
申込みフォームで簡単にお申込みができます。

申込み用
QRコード

募集人数　　限定 ７０名

締切 ４月２２日（火）（募集人数に達した時点で締切ります）

関連ホームページ　http://omiyadazai.ninja-web.net/

ホームページ
QRコード

■ 太宰が住んだ「大宮」という街
太宰治は昭和23年より、名作『人間失格』の執筆に取り掛かっていました。筑摩書房 社長であった古田晁は、彼へ静かな執筆環境を提供するため、自身の親戚の住む大宮を選びました。
古田氏は、同郷で知り合いである天ぷら屋「天清」のご主人小野澤氏より、自宅の奥の二部屋を書斎として提供することの了解を受け、また、奥様の義兄が経営する宇治病院へ通院させる事とし大宮へ連れてきました。
太宰が大宮に住んでいたのは、昭和23年4月29日から5月12日までの約2週間でしたが、小野澤氏家族とのふれあい、緑溢れる氷川神社参道などに囲まれ、心から安らぎを持って執筆活動に打込み、第三の手記の後半と、あとがきを書き上げ、ようやく『人間失格』を脱稿としました。
小野澤宅を後にする際は、「次の『グッド・バイ』もここで書きたいので、部屋は空けておいて下さい」と言い残し、三鷹の自宅へ向かいました。
それから1ヵ月後の6月12日昼過ぎ、太宰は突然ひとりで宇治病院へ古田氏を訪ねてきました。
「古田さんいる？」
しかし古田氏は、太宰を甲府で静養させるためにと、故郷の長野県塩尻へ、食材や物資を集めに出掛けていて留守でした。
そのあと太宰は、書斎の提供を受けた小野澤宅を訪れました。
「『グッド・バイ』がちっとも書けないでね、困っていますよ。。。」
と寂しそうにもらし、古田氏に逢えなかったのをたいへん残念がっていました。
太宰が、愛人山崎富栄と玉川上水に身を投げたのは、その翌日、13日の晩でした。

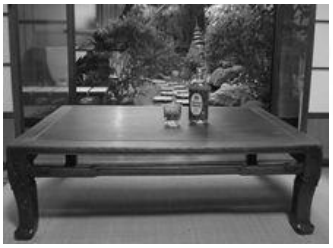
■ 太宰治 略歴
津軽有数の大地主の家に生まれ、父は貴族院議員 、兄は衆議院議員を務めた。青森中時代から作家を志望、弘前高を経て東大入学後、井伏鱒二に師事。昭和10年佐藤春夫らの日本浪曼派に参加。
「逆行」が第1回の芥川賞次席になり、作家としての地位をかためる。
14年結婚以後「富獄百景」「走れメロス」「新ハムレット」「津軽」「お伽草子」「女生徒」などを発表。戦後22年に代表作となった長編小説「斜陽」や「ヴィヨンの妻」「人間失格」などを相次いで発表したが、23年6月遺稿「グッド・バイ」を残して山崎富栄と共に玉川上水で入水自殺を遂げた。

■ 記念講演会 内訳　案内人：玉手 洋一
大宮には、大宰が2週間住んだ頃に見た懐かしい景色が、わずかですが、今でも残っています。案内人玉手とともに街歩きを疑似体験しませんか。
太宰は、ここ大宮で名作『人間失格を』脱稿、次の『グッド・バイ』もここで書き上げたいと、お世話になった人達に告げ、自宅のある三鷹市に戻ります。しかしそれから1か月後、愛人 山崎富栄と玉川上水に身を投げて果てる、それには大宮での生活が大きく関わっています。なぜ太宰治は死なねばならなかったのか、大宮に来なかったら死を避けることができたのか、その秘密を大宮で長らく調査研究を重ねた玉手ならではの視点でご説明します。

氷川神社

大宮製油

宇治病院旧宅


『人間失格』執筆机

■ 畑田（旧姓 藤縄）信子さんへのインタビュー
太宰が大宮に住んだ時に身の回りの世話をしていた、当時17歳の少女だった、畑田信子（旧姓 藤縄）さんは現在も都内某所でお元気にされています。
おそらく、太宰の面影を直接お聞きできる最後の方です。
太宰は、大宮での2週間をどのように暮らしたのか、その当時の思い出をお話ししていただくため取材した時のインタビュー映像をご覧いただきます。

畑田信子さん